

かき霧らし 雨の降る夜を

ほととぎす 鳴きて行くなり あはれその鳥

高橋虫麻呂歌集(巻九・一七五六)

ずいぶん暖かく、い
え、むしろ暑くなって
きました。春の鳥であ
る鶯が元気に鳴きつ
づける一方、卯の花(ウ
ツギ)の白い花も咲き
始め、ほととぎすの鳴
く時期が近づいている
のを感じます。ほとと
ぎすは卯の花や橘と
ともに、旧暦の夏の代
表的な景物でした。『万
葉集』で最も多い15

0首以上もの歌に詠ま
れた鳥です。
今回の歌は「霍公鳥
を詠める一首」という
長歌に付随する反歌で
す。『万葉集』で「ほ
ととぎす」は「霍公鳥」
と記されるのですが、
この表記の理由はよく
わかっていません。
高橋虫麻呂は伝説を
詠む歌人として知ら
れ、732年の歌があ

やまと
万葉がたり

ることから活動時期が
わかります。ただ、今
回の歌はいつどこで詠
まれたものか不明で
す。

長歌は「うぐひすの
卵の中にほととぎす
ひとり生まれて……」
から始まります。ほと
とぎすの託卵の習性
をふまえ、擬人化する
ことで、自らの疎外感
や孤独感をほととぎ

すに重ね合わせてい
るようです。続いて、
ほととぎすは鶯の父
母に似ない声で橘を
散らしながら鳴くが、
その声を聞きたいか
ら私の庭に住み続け
てくれ、と呼びかけて
終わります。

この夜の自らの孤独を
「その鳥」に投影して
いると受け取ることが
できます。「あはれそ
の鳥」が残す印象は、
ほかのほととぎすの歌
にはない重みがあると
感じます。「あはれ」
は切なさも素晴らしさ
も含むことができる、
強く感銘を表す語で
す。後に大伴家持もほ
ととぎすを「あはれの
鳥と言はぬ時なし」(巻
十八・四〇八九)と詠
んでいます。『万葉集』
で最も多く詠まれた鳥
は、『万葉集』唯一の
「あはれ」の鳥でもあ
りました。

【訳】夜空もくらくして雨の降る夜を、ほととぎ
すは鳴いていくようである。ああ、その鳥よ。

本日5月10日から愛
鳥週間です。さまざま
な鳥の鳴き声に耳を澄
ましてみようと思いま
す。
(県立万葉文化館主任
研究員・阪口由佳)

葛城かつらぎの

高間たかまの

草野くさの

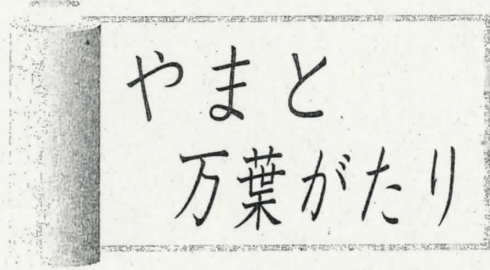
とく知りて

標刺しめさましを 今そ悔しき

(作者未詳 巻七・一三三七)

699(文武天皇)年5月24日、役小角が伊豆へ配流されたと『続日本紀』にありま
す。役小角は、役行者などとも称される飛鳥時代に実在した人物とみられますが、なかば伝説的な呪術者として知られます。超自然的な事績が『日本霊異記』(平安時代初期)をはじめとした後世のさ

まざまな文献に記されていいますが、初期の記録は『続日本紀』の当該記事です。そこには、葛城山に住んでいたこと、人々を惑わせて伊豆へ流されたことなどともに、呪術によって鬼神を使役したとも記されており、早くから伝説化していた様子がかえります。



『万葉集』に役小角が詠んだ歌はありませ
んが、ゆかりの地である葛城を詠んだ歌はあ
ります。なかでも今回
は「葛城の高間」(現
在の御所市高天)の歌
をご紹介します。

「標」とは、領有の場
所であることを示し、
出入りを禁止するため
の標識のことであり、
「標野」(巻一・二〇)

「標結ぶ」(巻七・
一二五二など)のよう
にも表現されます。
この歌は「寄草」と
題された歌群中の一首
で、「寄」と題して
分類された歌は巻三、
十、十一、十三、十四
にもありますが、巻七
という部立ての中にあ
り、何かたどえて恋
を表現した歌々が集め
られています。この歌
では、好ましい女性と
の結婚を「葛城の高間
の草野」の「標」にた
どえて表現していま
す。早く「標」をすれ
ばよかった、結婚の約
束を取り付けておけば
よかった、と自分の対
応の遅れを悔やみ嘆い
た歌です。

(県立万葉文化館企画
・研究係長・井上さや
か)

【訳】葛城の高間の草野を早く知って、しるしを立て
ておけばよかったものを。今こそ残念に思うよ。